

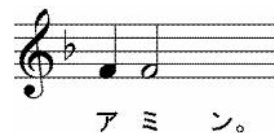
## 主 日 前 晩 課

### 第1調

注意 譜面中、五線譜上に  $\parallel\circ\parallel$  とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞（祈禱文）が持つ言葉の自然なリズムに則って歌うことを意味しています。ただ早く歌ってしまったり、棒読みになってしまったりしないよう、気をつけてください。この聖歌譜はそのために、歌詞の意味をとることが容易になるよう漢字を多く用いて作成しています。

2023年10月 釧路管轄司祭ステファン内田 作成

司祭) われら かみ つね あが ほ いま いつ よよ  
我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、



司祭) きた われら おう かみ こうはい  
來れ、我等の王・神に叩拜せん、

きた われら おう かみ こうはいふふく  
來れ、ハリストス・我等の王・神に叩拜俯伏せん、

きた われら おう かみ まえ こうはいふふく  
來れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩拜俯伏せん、

きた かれ こうはいふふく  
來れ、彼に叩拜俯伏せん、

【 第103 聖詠 (首誦聖詠：我が靈よ主を讃め揚げよ) 】

わ が た ま し い よ お、しゅを ほ め え あ げ よ。  
我 靈 主 讃 揚

しゅ よ、なんぢは あがめ ほめえらる。しゅ  
主 爾 崇 讃 主

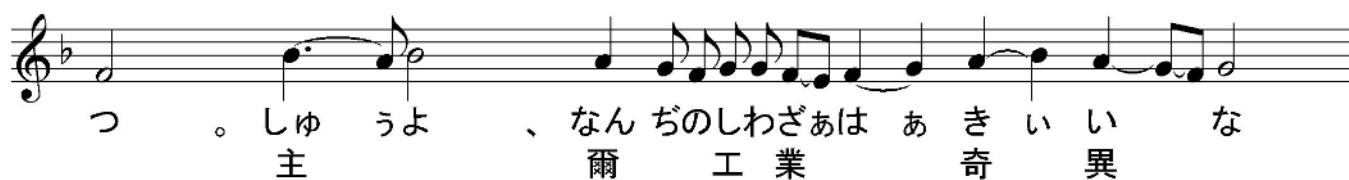
わ が か み よ、なんぢは い た っ て お お い な り。  
我 神 爾 至 大

しゅ よ、なんぢは あがめ ほめえらる。な  
主 爾 崇 讃 爾

んぢは こ お え い と い げ ん と を こ お む う れ り。  
光 榮 威 嚴 被 むうれり

しゅ よ、なんぢは あがめ ほめえらる。やま  
主 爾 崇 讃 山

の い た だ あ き に い み づ た っ つ う み い づ た 立  
嶺 水 立 水 立



つ 。 しゅ うよ 、 なん ぢのしわざあは あ き い い な  
主 爾 工 業 奇 異



り 。



やまの あいだ あに い み づ な が る う、 み い  
山 間 水 流 水



づ なあが る 。 しゅ うよ 、 なん ぢのしわざあは あ き い  
流 主 爾 工 業 奇



い な り 。



み な ち え を も っ て つ く れ り ち え  
皆 智 慧 以 作 智 慧



を も っ て つ く れ り 。



こ お え い は な ん ぢ ば ん ぶ つ を つ く り し しゅ に い き  
光 榮 爾 萬 物 作 主 歸



す 。



こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も  
光 榮 父 子 聖 神 歸 今



い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。

何 時 世 世


 アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみ  
 神


 よこうえいはなんぢにきす。  
 光 榮 爾 歸


 アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみ  
 神


 よこうえいはなんぢにきす。  
 光 榮 爾 歸


 アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみ  
 神


 よこうえいはなんぢにきす。  
 光 榮 爾 歸

【 大聯禱 】

司祭) <sup>われらあんわ</sup>我等安和<sup>しゅ</sup>にして主<sup>いの</sup>に禱らん、


 しゅあわれめよ。  
 主 憐

司祭) <sup>うえ</sup>上より降る安和と我等が<sup>たましい</sup>靈の救<sup>すくい</sup>の爲に主<sup>しゅ</sup>に禱らん、


 しゅあわれめよ。  
 主 憐

司祭) <sup>ぜんせかい</sup>全世界の安和、<sup>あんわ</sup>神の聖なる<sup>かみ</sup>諸<sup>せい</sup>教會<sup>しよきようかい</sup>の堅立、及び衆<sup>けんりつ</sup>人の合<sup>およ</sup>一の爲に主<sup>しゅうじん</sup>に禱らん、


 しゅあわれめよ。  
 主 憐

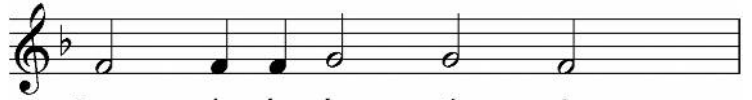
司祭) <sup>こ</sup>此の聖堂、及び信と<sup>せいどう</sup>慎<sup>およ</sup>と神を畏る<sup>しん</sup>る心<sup>つつしみ</sup>とを以て此に來る<sup>かみ</sup>者の爲に主<sup>おそ</sup>に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

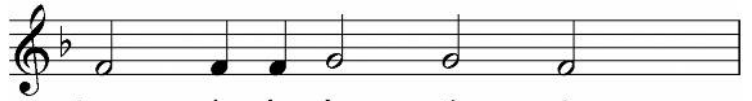
司祭) 教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、司祭の尊品、ハリス

トスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) 我國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) 此の都邑と凡の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) 氣候順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) 航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び

彼等の救の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

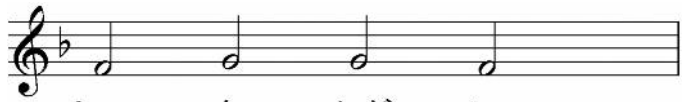


しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>しせいしけつ</sup> 至聖至潔にして <sup>いた</sup> 至 <sup>さんび</sup> りて <sup>われら</sup> 讚美たる我等の <sup>こうえい</sup> 光榮の <sup>ちよさい</sup> 女宰、 <sup>しょうしんちよ</sup> 生神女、 <sup>えいていどうちよ</sup> 永貞童女マリヤと、

<sup>しよせいじん</sup> 諸聖人を <sup>きおく</sup> 記憶して、 <sup>われらおのれ</sup> 我等己の <sup>みおよ</sup> 身及び <sup>たがい</sup> 互に <sup>おのおの</sup> 各の <sup>み</sup> 身を以て、 <sup>もつ</sup> 並に <sup>ならび</sup> 悉く <sup>ことごと</sup> の我等の

<sup>いのち</sup> 生命を以て、 <sup>もつ</sup> ハリストス <sup>かみ</sup> 神に <sup>いたく</sup> 委託せん、



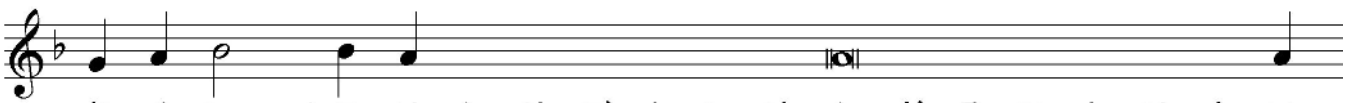
しゅ な んぢ に 。  
主 爾

司祭) <sup>けだし</sup> 蓋、 <sup>およ</sup> 凡そ <sup>こうえい</sup> 光榮 <sup>そんきふくはい</sup> 尊貴 <sup>なんぢちち</sup> 伏拜は <sup>こ</sup> 爾 <sup>せいしん</sup> 父と子と聖神に <sup>き</sup> 歸す、 <sup>いま</sup> 今も <sup>いつ</sup> 何時も <sup>よよ</sup> 世々に、

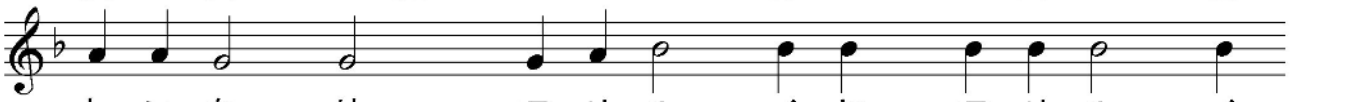


ア ミ ン。

【 第一カフィズマ 第一段 】



あくにんのはかりごとゆかざるひとはさい  
悪人 謀 行 人 福



わいなり、ア Ril イヤ、ア Ril イ



ヤ、ア Ril イヤ。



しゅはぎじんのみちをしる、あくにんのみちはほろ  
主義人 途 知 悪人 途 滅



びん、ア Ril イヤ、ア Ril イヤ、アリ



ル イ ヤ。

おそれしゆにつとめよ、おののきてそのまえ  
 畏 主 勤 戦 其 前

によろこべよ、アリル イヤ、アリル イ  
 喜

ヤ、アリル イヤ。

およそかれをたのむものはさいわいなり、  
 凡 彼 侍 者 福

アリル イヤ、アリル イヤ、アリル

イヤ。

しゆやたてよ、わがかみや、われをすくいた給  
 主 立 吾 神 我 救 給

まえ、アリル イヤ、アリル イヤ、

アリル イヤ。

すくいしゆによるなんぢのこうふくはなんぢのた  
 救 主 依 爾 降 福 爾 民

みにあり、アリル イヤ、アリル イ  
 在

ヤ、アリル イヤ。

こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も  
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。 ア リ ル イ ヤ 、 ア  
何 時 世 世

リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわ <sup>しゅ いの</sup> 我等復又安和にして主に禱らん、

しゅ あ わ れ め よ 。

主 憐

司祭) かみ なんぢ おんちやう もつ われら たす すく あわれ まも 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しゅ あ わ れ め よ 。

主 憐

司祭) しせいしけつ <sup>いた</sup> <sup>さんび</sup> <sup>われら</sup> <sup>こうえい</sup> <sup>ちよさい</sup> <sup>しょうしんちよ</sup> <sup>えいていどうちよ</sup> 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

<sup>しよせいじん</sup> <sup>きおく</sup> <sup>われらおのれ</sup> <sup>みおよ</sup> <sup>たがい</sup> <sup>おのおの</sup> <sup>み</sup> <sup>もつ</sup> <sup>ならび</sup> <sup>ことごと</sup> <sup>われら</sup> 諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

<sup>いのち</sup> <sup>もつ</sup> <sup>かみ</sup> <sup>いたく</sup> 生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅ な ん ぢ に 。

主 爾

司祭) <sup>けだしけんべいおよ</sup> <sup>くに</sup> <sup>けんのう</sup> <sup>こうえい</sup> <sup>なんぢちち</sup> <sup>こ</sup> <sup>せいしん</sup> <sup>き</sup> <sup>いま</sup> <sup>いつ</sup> <sup>よよ</sup> 蓋権柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、

ア ミ ン 。

【 第140聖詠 (主よ爾に籲ぶ) 第1調 】



しゅよ、なんぢによぶ、すみやかにわれに格  
主 爾 呼 速 我 格

たりたまえ、しゅよ、われにききたま  
給 主 我 聽 給

あえ、しゅよ、なんぢによぶ、すみやか  
主 爾 呼 速

にわれにいたりたまえ、なんぢによぶとき  
我 格 給 爾 呼 時

わがいのりのこえをいれたまあえ、しゅ  
我 禱 聲 納 給 主

よわれにききたまあえ。ねがわくは  
我 聽 給 願

わがいのりはこうろのかおりのごとくな  
我 禱 香 爐 香 如 爾

んぢがかんばせのまえにのぼおり、わがて  
顔 前 登 我 手

をあぐるはくれのまつりのごとくいれら  
舉 暮 祭 如 納

れん。しゅよ、われにききたまあえ。  
主 我 聽 給

誦經) しゅ わくち まもり お わくちびる もん ふせ たま わ こころ よこしま ことば かたぶ  
主よ、我が口に衛を置き、我が唇の門を扞ぎ給え、我が心に邪なる言に傾

きて、不法を行ふ人と共に、罪の推諉せしむる母れ、願わくは我は彼等の甘味を嘗め

ざらん。義人は我を罰すべし、是れ矜恤なり、我を譴むべし、是れ極と美しき膏、我

が首を悩ます能わざる者なり、唯我が禱は彼等の悪事に敵す。彼等の首長は巖石の

あいだ さん わ ことば にゆうわ き われら つち ごと き くだ わ ほね ちごく ぐち  
間に散じ、我が言の柔和なるを聴く。我等を土の如く斫り砕き、我が骨は地獄の口に

ち お しゅ しゅ ただわ め なんぢ あお われなんぢ たの わ たましい しりぞ なか  
散りて落つ。主よ、主よ、唯我が目は爾を仰ぎ、我爾を恃む、我が靈を退くる母

わ ため もう わな ふほうしゃ あみ われ まも たま ふけんしゃ おのれ あみ かか  
れ。我が爲に設けられし罊、不法者の網より我を護り給え。不虔者は己の網に罹り、

ただわれ す え  
唯我は過ぐるを得ん。

## 【 第141聖詠 】

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい  
我が聲を以て主に呼び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、我が憂を

そのまえ あらわ わ たましい うち よわ とき なんぢ われ みち し わ ゆ みち おい  
其前に顯せり。我が靈の衷に弱りし時、爾は私の途を知れり、我が行く路に於て、

かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと もの われ  
彼等は竊に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我

のが ところ わ たましい かえりみ もの しゅ われなんぢ よ い なんぢ われ  
に通る所なく、我が靈を顧る者なし。主よ、我爾に呼びて云えり、爾は私の

かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま われはなはだよわ  
避所なり、生ける者の地に於いて私の分なり。我が呼ぶを聴き給え、我甚弱りたれば

われ はくがい もの すく たま かれら われ つよ  
なり、我を迫害する者より救い給え、彼等は我より強ければなり。

句⑩ わ たましい ひとや ひ いだ われ なんぢ な さんえい たま  
我が靈を獄より引き出して、我に爾の名を讚榮せしめ給え。

讃詞⑩ せい しゅ わ くれ いのり い われら つみ ゆるし あた たま なんぢ ひとりせかい ふく  
聖なる主よ、我が晩の禱を納れて、我等に罪の赦を與え給え、爾は獨世界に復

かつ あらわ もの  
活を顯しし者なればなり。

句⑨ なんぢおん われ たま とき ぎじん われ めぐ  
爾恩を我に賜わん時、義人は我を環らん。

讃詞⑨ ひとびと めぐ これ かこ こうち し ふくかつ しゅ こうえい き かれ  
人人よ、シオンを廻り、之を圍みて、是の中に死より復活せし主に光榮を歸せよ、彼

われら ふほう すく わ かみ  
は我等を不法より救いし吾が神なればなり。

句⑧ しゅ われふか ところ なんぢ よ しゅ わ こえ き たま  
主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給え、

讃詞⑧ ひとびと きた うた おが し ふくかつ さんえい かれ てき いぎない  
人人よ、來れ、歌いてハリストスを拜み、死より復活せしを讚榮せん、彼は敵の誘惑

より世界を救いし吾が神なればなり。

句⑦ ねが なんぢ みみ わ いのり こえ き い  
願わくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

讃詞⑦ しょてん たの ち もとい ラッパ ふ しょざん よろこ よ けだしみ  
諸天は樂しめ、地の基は角を吹け、諸山は歡びて呼べ、蓋視よ、エムヌイルは

われら つみ じゅうじか てい いのち たま ふくかつ もの し ころ ひと  
我等の罪を十字架に釘せり、生を賜い、アダムを復活せしめし者は死を殺せり、人を

あい しゅ  
愛する主なればなり。

句⑥ <sup>しゅ も なんぢふほう ただ しゅ だれ よ た しか なんぢ ゆるし ひと なんぢ</sup>  
主よ、若し爾不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾  
<sup>まえ つつし ため</sup>  
の前に敬まん爲なり。

讃詞⑥ <sup>あまん われら ため み じゅうじか てい くるしみ う ほうむ し ふくかつ</sup>  
甘じて我等の爲に身にて十字架に釘せられ、苦を受け、葬られ、死より復活せ

<sup>しゅ うた い せいきょう もつ なんぢ きょうかい かた われら いのち へい</sup>  
し主を歌いて曰わん、ハリストスよ、正教を以て爾の教會を堅め、我等の生命を平

<sup>あん たま なんぢ じんじ ひと あい しゅ</sup>  
安ならしめ給え、爾は仁慈にして人を愛する主なればなり。

句⑤ <sup>われしゅ のぞ わ たましいしゅ のぞ われかれ ことば たの</sup>  
我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

讃詞⑤ <sup>わ かみ われらふとう もの いのち こ なんぢ はか まえ た なんぢ い</sup>  
ハリストス我が神よ、我等不當なる者は生命を籠むる爾の墓の前に立ちて、爾の言い

<sup>がた じれん さんえい たてまつ けだしなんぢ つみ もの せかい ふくかつ たま ため じゅう</sup>  
難き慈憐に讚榮を奉る。蓋爾は、罪なき者よ、世界に復活を賜わん爲に、十

<sup>じか し う たま ひと あい しゅ</sup>  
字架と死とを受け給えり、人を愛する主なればなり。

句④ <sup>わ たましいしゅ ま ばんにん あさ ま ばんにん あさ ま はなはだ</sup>  
我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

讃詞④ <sup>ちち どうむげん どうえいざい ことば い がた どうていぢよ たい い われら ため あまん</sup>  
父と同無原・同永在なる言、言い難く童貞女の胎より出でて、我等の爲に甘じ

<sup>じゅうじか し う こうえい うち ふくかつ もの うた い いのち たま しゅ わ</sup>  
て十字架と死とを受け、光榮の中に復活せし者を歌いて曰わん、生命を賜う主、我が

<sup>たましい きゅうしゃ こうえい なんぢ き</sup>  
靈の救者よ、光榮は爾に歸す。

句③ <sup>ねが しゅ たの けだしあわれみ しゅ おおい あがない かれ かれ</sup>  
願わくはイスライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼

<sup>そのことごと ふほう あがな</sup>  
はイスライリを其悉くの不法より贖わん。

讃詞③ <sup>せい しゅうぐん せい いつさい ぞうぶつ とうと しょうしんぢよ せかい ぢよさい きゅうせい</sup>  
聖なる衆軍より聖にして一切の造物より尊き生神女、世界の女宰、救世

<sup>しゅ う もの なんぢ きとう もつ われら もろもろ つみ やまい わざわい すく たま</sup>  
主を生みし者よ、爾の祈禱を以て我等を諸の罪と疾病と災禍より救い給え。

句② <sup>ばんみん しゅ ほ あ ばんぞく かれ あが ほ</sup>  
萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ、

讃詞② <sup>じれん もん しょうぢよ せつ なんぢ いの わ ひび たましい す すみやか</sup>  
慈憐の門なる少女よ、切に爾に祈る、我が卑微なる靈を棄つるなく、速に

<sup>あわれみ た これ わ しょざい ふち すく たま いさぎよ どうていぢよ なんぢ おんちよう</sup>  
憐を垂れて、之を我が諸罪の淵より救い給え。潔き童貞女よ、爾の恩寵を

<sup>あらた われ うえ かがや たま</sup>  
新にして、我の上に輝かし給え。

句① <sup>けだしかれ われら ほどこ あわれみ おおい しゅ しんじつ なが せん</sup>  
蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

讃詞① <sup>ちよさい なんぢ かみ ひとびと あわ たま なんぢ ひとりし ぞく せい しんせい ふきゆう</sup> 女 宰よ、爾 は神を人人に合せ給えり、爾 は獨 死に屬する性を神聖なる不朽に

<sup>のぼ なんぢ ちじょう もの すくい なが たま なんぢ しょうしんぢよ われら もろもろ く</sup> 升せたり。爾 は地上の者に救を流し給えり。爾、生神女よ、我等を諸の苦

<sup>なん のが たま</sup> 難より脱れしめ給え。

【 ドグマチカ (生神女讃詞) 第1調 】

The image shows a musical score for a hymn. It consists of ten staves of music, each with a treble clef and a key signature of one flat (B-flat). The lyrics are written in Japanese characters below the notes. The score includes repeat signs (double bar lines with dots) and a double bar line with a repeat sign at the end of the piece. The lyrics are as follows:

こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も  
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に い 、 ア ミ ン。  
何 時 世 世

ひ と お よ り う ま れ て し ゅ さ い を う み し  
人 生 主 宰 生

ぜん せ か い の こ う え い と て ん の も ん な る ど う て い ぢ ょ  
全 世 界 光 榮 天 門 童 貞 女

マ リ イ ヤ 、 し ょ て え ん し の う た 、 し ょ  
諸 天 使 歌 諸

し ん じ ゃ の か ざ り な る も の を ほ め う た う べ え  
信 者 飾 者 讚 歌

し 。 か あ れ は て ん と ひ と し く 、 か み の  
彼 天 均 神

み や と ひ と し き も の と し て あ ら わ れ た あ  
宮 均 者 顯

り 、 か あ れ は あ だ の へ だ て を や ぶ り て  
彼 仇 隔 破

わ ぼ く を む す び 、 く に を ひ ら け え  
 和 睦 締 國 開

り 。 わ れ ら は か れ を し ん の か た め と な 爲  
 我 等 彼 信 固 爲

し 、 か れ よ り う ま れ し し ゅ を ふ せ ぎ ま も る も  
 彼 生 主 扞 衛 者

の と な あ す 。 い さ め よ お 、 か み の  
 爲 勇 神

た み よ 、 い さ め よ 、 し ゅ は て き に か た ん、  
 民 勇 主 敵 勝

ぜん の う し や な れ ば な あ り  
 全 能 者

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、<sup>つつし</sup> 肅 <sup>た</sup> みて立て、

【 聖ソフロニイの祝文 】

せ い に し て ふ く た る じ ょ う せ い な る て ん の ち ち の  
 聖 福 常 生 天 父

せ い な る こ う え い の お だ や か な る ひ か り イ イ  
 聖 光 榮 の 穩 光

ス ス ハ リ ス ト ス よ 、 わ れ ら ひ の い り に い た り く  
 我 等 日 入 至 暮

れ の ひ か り を み て 、 か み ち ち と こ と せ い し ん  
 光 見 神 父 子 聖 神

を う と お う。い の ち を た も う か み の こ 子  
歌 生 命 賜 神 子

よ 、 な ん ぢ は い つ も け い げ ん の こ え に て う た わ  
爾 何 時 敬 虔 聲 歌

る べ し 、 ゆ え に せ か い は な ん ぢ を あ が め  
故 世 界 爾 崇

ほ む 。  
讚

【 大プロキメン 第6調 】

司祭) <sup>つつし き</sup>謹みて聴くべし、<sup>しゅうじん へいあん えいち</sup>衆人に平安、睿智、

誦經) <sup>プロキメン しゅ おう</sup>提綱、主は王たり、<sup>かれ いげん き</sup>彼は威嚴を衣たり、

しゅ は お う た り 、 か れ は い げ ん を き た  
主 王 彼 威 嚴 衣

り 、

誦經) <sup>しゅ のうりよく き またこれ おび</sup>主は能力を衣、又之を帯にせり、

しゅ は お う た り 、 か れ は い げ ん を き た  
主 王 彼 威 嚴 衣

り 、

誦經) <sup>ゆえ せかい けんご うご</sup>故に世界は堅固にして動かざらん、

しゅ は お う た り 、 か れ は い げ ん を き た  
主 王 彼 威 嚴 衣



り、

誦經) <sup>しゅ</sup>主よ、<sup>せいとく</sup>聖徳は<sup>なんぢ</sup>爾の<sup>いえ</sup>家に<sup>ぞく</sup>屬して<sup>えいえん</sup>永遠に<sup>いた</sup>至らん、



しゅはおうたり、かれはいげんをきた  
主 王 彼 威 嚴 衣



り、

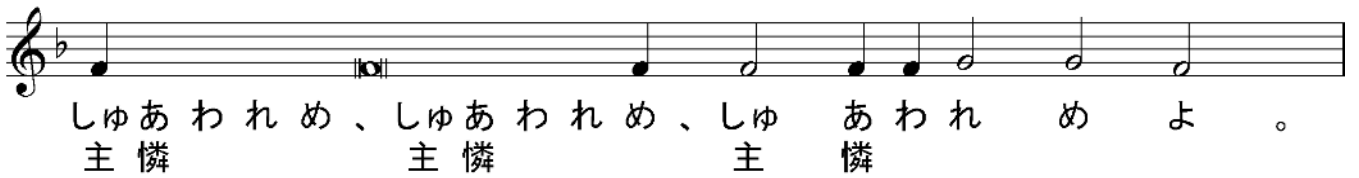
誦經) <sup>しゅ</sup>主は<sup>おう</sup>王たり、



かれはいげんをきたり。  
彼 威 嚴 衣

【 重聯禱 】

司祭) <sup>かみ</sup>神よ、<sup>なんぢ</sup>爾の<sup>おお</sup>大なる<sup>あわれみ</sup>憐に<sup>よ</sup>因りて我等を<sup>われら</sup>憐めよ、<sup>なんぢ</sup>爾に<sup>いの</sup>禱る、<sup>き</sup>聆き<sup>い</sup>納れて<sup>あわれ</sup>憐めよ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>またわがくに</sup>又我國の<sup>てんのう</sup>天皇及<sup>くに</sup>び國を<sup>つかさど</sup>司る<sup>もの</sup>者の<sup>ため</sup>爲に<sup>いの</sup>禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>またきょうかい</sup>又教會を<sup>つかさど</sup>司る<sup>そんき</sup>尊貴なる我等の<sup>われら</sup>全<sup>ぜん</sup>日本<sup>につぼん</sup>の府<sup>ふしゅきょう</sup>主教セラフィム、<sup>およ</sup>及び<sup>お</sup>ハリストスに<sup>お</sup>於

ける<sup>ことごと</sup>悉<sup>われら</sup>くの我等の<sup>けいてい</sup>兄弟<sup>ため</sup>の爲に<sup>いの</sup>禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>またつね</sup>又恒に<sup>きおく</sup>記憶せらるる<sup>ふく</sup>福<sup>こ</sup>たる此の<sup>せいどう</sup>聖堂<sup>こんりゅうしゃ</sup>の建<sup>およ</sup>立<sup>す</sup>者、<sup>ねむ</sup>及び<sup>ことごと</sup>既に<sup>ふ</sup>寝<sup>そけいてい</sup>りし<sup>い</sup>悉<sup>い</sup>くの<sup>い</sup>父祖<sup>い</sup>兄弟、

<sup>こ</sup>此<sup>ところ</sup>の處<sup>しょうほう</sup>と<sup>ほうむ</sup>諸方<sup>せいきょう</sup>とに<sup>もの</sup>葬<sup>ため</sup>られたる<sup>い</sup>正<sup>い</sup>教<sup>い</sup>の<sup>い</sup>者の爲に<sup>い</sup>禱る、

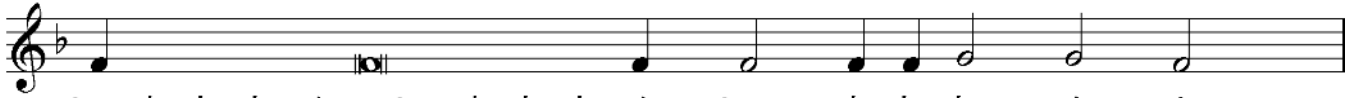




しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ 。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>またかみ</sup>又 <sup>しよぼくこ</sup>神の諸 <sup>せいどう</sup>僕此の <sup>けいてい</sup>聖堂の <sup>じれん</sup>兄弟に、<sup>せいめい</sup>慈憐、<sup>へいあん</sup>生命、<sup>そうけん</sup>平安、<sup>きゆうしょく</sup>壮健、<sup>けんこ</sup>救 贖、<sup>かんゆう</sup>眷顧、寛宥、

<sup>およ</sup>及び <sup>しよざい</sup>諸罪の <sup>ゆるし</sup>赦 <sup>たま</sup>を賜わ <sup>ため</sup>んが <sup>いの</sup>爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ 。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>またこ</sup>又此の <sup>せいどう</sup>聖堂に <sup>もの</sup>物を <sup>たてまつ</sup>獻り、<sup>ぜんぎょう</sup>善業を <sup>おこな</sup>行い、<sup>これ</sup>之に <sup>ろう</sup>勞し、<sup>これ</sup>之に <sup>うた</sup>歌い、<sup>およ</sup>及び <sup>ここ</sup>此に <sup>た</sup>立ちて

<sup>なんぢ</sup>爾の <sup>おお</sup>大にして <sup>ゆたか</sup>豊なる <sup>あわれみ</sup>憐 <sup>あお</sup>を仰ぎ <sup>のぞ</sup>望む <sup>もの</sup>者の <sup>ため</sup>爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ 。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>けだしなんぢ</sup>蓋 <sup>じれん</sup>爾は <sup>ひと</sup>慈憐にして <sup>あい</sup>人を <sup>かみ</sup>愛する <sup>われら</sup>神なり、<sup>こうえい</sup>我等 <sup>なんぢちち</sup>光榮を <sup>こ</sup>爾 <sup>せいしん</sup>父と子と <sup>けん</sup>聖神に <sup>いま</sup>獻ず、<sup>いま</sup>今も

<sup>いつ</sup>何時も <sup>よよ</sup>世に、



ア ミ ン。

誦經) <sup>しゅ</sup>主よ、<sup>われら</sup>我等を守り <sup>まも</sup>罪なくして <sup>つみ</sup>此の <sup>こ</sup>晩を <sup>くれ</sup>度らせ <sup>わた</sup>給え、<sup>たま</sup>主 <sup>しゅわ</sup>吾が <sup>せんそ</sup>先祖の <sup>かみ</sup>神よ、<sup>なんぢ</sup>爾 <sup>あが</sup>は <sup>ほ</sup>崇め <sup>讃</sup>讚

<sup>なんぢ</sup>められ <sup>な</sup>爾 <sup>よよ</sup>の名は <sup>とうと</sup>世に <sup>うた</sup>尊 <sup>うた</sup>み歌 <sup>うた</sup>わる、<sup>うた</sup>ア <sup>うた</sup>ミン。

<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>なんぢ</sup>爾 <sup>たの</sup>を <sup>よ</sup>恃むに <sup>なんぢ</sup>因りて、<sup>あわれみ</sup>爾 <sup>われら</sup>の <sup>たま</sup>憐 <sup>しゅ</sup>を <sup>なんぢ</sup>我等に <sup>あが</sup>垂れ <sup>ほ</sup>給え、<sup>ほ</sup>主よ、<sup>ほ</sup>爾 <sup>ほ</sup>は <sup>ほ</sup>崇め <sup>讃</sup>讚めらる、

<sup>なんぢ</sup>爾 <sup>いましめ</sup>の <sup>われ</sup>誠 <sup>おし</sup>を <sup>たま</sup>我に <sup>しゅさい</sup>訓え <sup>なんぢ</sup>給え、<sup>あがめほ</sup>主 <sup>なんぢ</sup>宰よ、<sup>なんぢ</sup>爾 <sup>いましめ</sup>は <sup>われ</sup>崇 <sup>さと</sup>讃 <sup>たま</sup>めらる、<sup>たま</sup>爾 <sup>たま</sup>の <sup>たま</sup>誠 <sup>たま</sup>を <sup>たま</sup>我に <sup>たま</sup>悟 <sup>たま</sup>らせ <sup>たま</sup>給

<sup>せい</sup>え、<sup>もの</sup>聖なる <sup>なんぢ</sup>者よ、<sup>あがめほ</sup>爾 <sup>なんぢ</sup>は <sup>いましめ</sup>崇 <sup>われ</sup>讃 <sup>たら</sup>めらる、<sup>たま</sup>爾 <sup>たま</sup>の <sup>たま</sup>誠 <sup>たま</sup>にて <sup>たま</sup>我 <sup>たま</sup>を <sup>たま</sup>照 <sup>たま</sup>し <sup>たま</sup>給え。

<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>なんぢ</sup>爾 <sup>あわれみ</sup>の <sup>よよ</sup>憐 <sup>なんぢ</sup>は <sup>て</sup>世に <sup>つく</sup>在り、<sup>もの</sup>爾 <sup>す</sup>の手 <sup>なか</sup>の <sup>ほまれ</sup>造り <sup>なんぢ</sup>し <sup>き</sup>物 <sup>き</sup>を <sup>き</sup>棄 <sup>き</sup>つる <sup>き</sup>勿 <sup>き</sup>れ、<sup>き</sup>讃 <sup>き</sup>は <sup>き</sup>爾 <sup>き</sup>に <sup>き</sup>歸 <sup>き</sup>し、

<sup>うた</sup>歌 <sup>なんぢ</sup>は <sup>き</sup>爾 <sup>こうえい</sup>に <sup>なんぢちち</sup>歸 <sup>こ</sup>し、<sup>せいしん</sup>光 <sup>き</sup>榮 <sup>き</sup>は <sup>き</sup>爾 <sup>き</sup>父 <sup>き</sup>と <sup>き</sup>子 <sup>き</sup>と <sup>き</sup>聖 <sup>き</sup>神 <sup>き</sup>に <sup>き</sup>歸 <sup>き</sup>す、<sup>き</sup>今 <sup>き</sup>も <sup>き</sup>何 <sup>き</sup>時 <sup>き</sup>も <sup>き</sup>世 <sup>き</sup>に <sup>き</sup>、<sup>き</sup>ア <sup>き</sup>ミン。

【 増聯禱 】

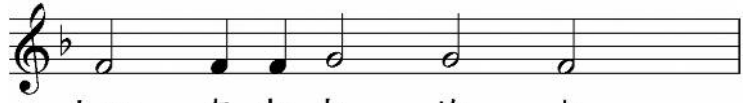
司祭) <sup>われらしゅ</sup>我等 <sup>まえ</sup>主 <sup>わ</sup>の <sup>くれ</sup>前 <sup>いのり</sup>に <sup>ま</sup>吾 <sup>くわ</sup>が <sup>ま</sup>晩 <sup>くわ</sup>の <sup>ま</sup>禱 <sup>くわ</sup>を <sup>くわ</sup>増 <sup>くわ</sup>し <sup>くわ</sup>加 <sup>くわ</sup>えん、





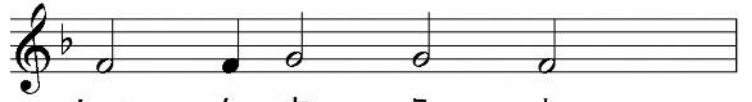
しゅ あわれ めよ。  
主 憐

司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも</sup> 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



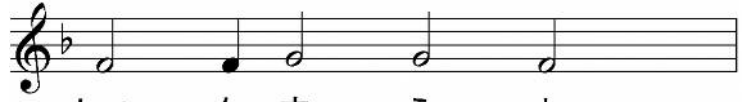
しゅ あわれ めよ。  
主 憐

司祭) <sup>こ くれ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと</sup> 此の晩の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、



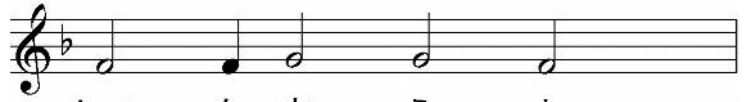
しゅ たま えよ。  
主 賜

司祭) <sup>へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしゃ たま しゅ もと</sup> 平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、



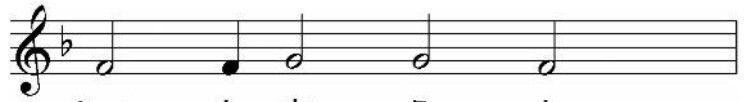
しゅ たま えよ。  
主 賜

司祭) <sup>われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと</sup> 我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、



しゅ たま えよ。  
主 賜

司祭) <sup>われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと</sup> 我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



しゅ たま えよ。  
主 賜

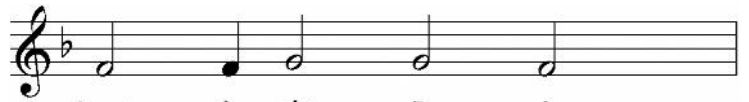
司祭) <sup>われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと</sup> 我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



しゅ たま えよ。  
主 賜

司祭) <sup>われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ</sup> 我等の生命の終がハリストティアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及びハ

<sup>リス</sup>トスの畏る可き審判に於て宜しき對<sup>を</sup>をなすを賜わんことを求む、

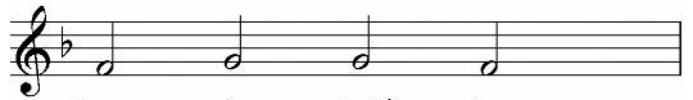


しゅ たま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>しせいしけつ</sup> 至聖至潔にして <sup>いた</sup> 至 <sup>さんび</sup> りて <sup>われら</sup> 讚美たる <sup>こうえい</sup> 我等の <sup>ちよさい</sup> 光榮の <sup>しょうしんぢよ</sup> 女宰、<sup>えいていどうぢよ</sup> 生神女、永貞童女マリヤと、

<sup>しよせいじん</sup> 諸聖人 <sup>きおく</sup> を記憶して、<sup>われらおのれ</sup> 我等己の身 <sup>みおよ</sup> 及び <sup>たがい</sup> 互に <sup>おのおの</sup> 各の身を以て、<sup>み</sup> 並に <sup>もつ</sup> 悉くの <sup>ならび</sup> 我等の <sup>ことごと</sup> 生命を以て、<sup>われら</sup> ハリストス <sup>かみ</sup> 神に <sup>いたく</sup> 委託せん、

い



しゅ な んぢ に 。  
主 爾

司祭) <sup>けだしなんぢ</sup> 蓋爾は <sup>ぜん</sup> 善にして <sup>ひと</sup> 人を <sup>あい</sup> 愛する <sup>かみ</sup> 神なり、<sup>われら</sup> 我等 <sup>こうえい</sup> 光榮を <sup>なんぢちち</sup> 爾父と <sup>こ</sup> 子と <sup>せいしん</sup> 聖神に <sup>けん</sup> 獻ず、<sup>いま</sup> 今も

<sup>いつ</sup> 何時も <sup>よよ</sup> 世世に、



ア ミ ン。

司祭) <sup>しゅうじん</sup> 衆人に <sup>へいあん</sup> 平安



なんぢの し んにも 。  
爾 神

司祭) <sup>われら</sup> 我等の <sup>こうべ</sup> 首を <sup>しゅ</sup> 主に <sup>かが</sup> 屈めん



しゅ な んぢ に 。  
主 爾

司祭) (黙經) <sup>しゅわ</sup> 主我が <sup>かみ</sup> 神、<sup>てん</sup> 天を <sup>かが</sup> 屈めて <sup>じんるい</sup> 人類を <sup>すく</sup> 救うが <sup>ため</sup> 爲に <sup>くだ</sup> 降りし <sup>もの</sup> 者よ、<sup>なんぢ</sup> 爾の <sup>しよぼく</sup> 諸僕と <sup>なんぢ</sup> 爾の

<sup>しぎょう</sup> 嗣業とを <sup>かえり</sup> 顧み <sup>たま</sup> 給え、<sup>けだしなんぢ</sup> 蓋爾の <sup>しよぼく</sup> 諸僕は、<sup>なんぢおそ</sup> 爾 <sup>ひと</sup> 畏るべくして <sup>あい</sup> 人を愛する

<sup>しんぱんしゃ</sup> 審判者に <sup>こうべ</sup> 首を <sup>かが</sup> 屈め、<sup>おのれ</sup> 己の <sup>くび</sup> 頸を <sup>ふ</sup> 伏し、<sup>ひと</sup> 人の <sup>たすけ</sup> 助を <sup>ま</sup> 俟たず、<sup>すなわちなんぢ</sup> 乃爾の <sup>あわれみ</sup> 憐を

<sup>ま</sup> 俟ち、<sup>なんぢ</sup> 爾の <sup>すくい</sup> 救を <sup>あお</sup> 仰ぐ、<sup>もと</sup> 求む <sup>かれら</sup> 彼等を <sup>つね</sup> 恒に <sup>まも</sup> 護り、<sup>かれら</sup> 彼等を <sup>こ</sup> 此の <sup>ゆうべ</sup> 夕にも、<sup>つぎ</sup> 次て <sup>いた</sup> 至る

<sup>よる</sup> 夜にも、<sup>およそ</sup> 凡の <sup>てきおよそ</sup> 敵 <sup>あくま</sup> 凡の <sup>かんぼう</sup> 悪魔の <sup>むな</sup> 姦謀と <sup>しりよ</sup> 虚しき <sup>あ</sup> 思慮と <sup>いねん</sup> 悪しき <sup>まも</sup> 意念と <sup>たま</sup> より <sup>いた</sup> 護り <sup>たま</sup> 給え、)

<sup>ねが</sup> 願わくは <sup>なんぢちち</sup> 爾父と <sup>こ</sup> 子と <sup>せいしん</sup> 聖神の <sup>くに</sup> 國の <sup>けんぺい</sup> 權柄は <sup>さんようさんえい</sup> 讚揚讚榮せられん、<sup>いま</sup> 今も <sup>いつ</sup> 何時も <sup>よよ</sup> 世世に、



【 挿句讃頌 第1調 】

誦經) ハリストスよ、爾なんぢの苦くるしみにて我等は苦われらを免れ、爾なんぢの復活ふくかつにて我等は淪滅われらより救ほろびわれたり。主しゅよ、光榮こうえいは爾なんぢに歸す。

句 主しゅは王おうたり、彼かれは威嚴いげんを衣きたり。

讃頌 造物ぞうぶつは喜よろこぶべし、諸天しよてんは樂たのしむべし、諸民しよみんは樂たのしみて手てを拍うつべし。蓋けだしわ吾きゆうせいが救せ世

主しゅハリストスは我等われらの罪つみを十じゅう字架じかに釘ていし、死しを殺ころして、我等われらに生いのちを賜たまい、萬族ばんぞくの原げん

祖そたる陥おちりシアダムを復ふく活かつせしめ給たまえり、人ひとを愛あいする主しゅなればなり。

句 故ゆえに世界せかいは堅固けんこにして動うごかざらん。

讃頌 悟さとり難がたき主しゅよ、爾なんぢは天地てんちの王おうにして、仁愛じんあいに因よりて甘あまんじて十じゅう字架じかに釘ていせられたり。

地獄ぢごくは下しもに爾なんぢを迎むかえて哀かなしみ、義人等ぎじんらの靈たましいは爾なんぢを接うけて喜よろこび、アダムは爾なんぢ造ぞう

成せい主しゅを最いと下しもなる處ところに見みて復ふく活かつせり。嗚呼ああ奇蹟きせきや、萬有ばんゆうの生命いのちは如何いかにぞ死しを嘗なめたる、是こ

れ世界せかいを照てらさんと欲ほつせし故ゆえなり。此これに由よりて世界せかいは呼よびて云いう、死しより復ふく活かつせし主しゅよ、光

榮えいは爾なんぢに歸す。

句 主しゅよ、聖徳せいとくは爾なんぢの家いえに屬ぞくして永えい遠えんに至いたらん。

讃頌 攜香女けいこうぢよは香料こうりょうを攜たづさ、急いそぎ且かつ哭なきて爾なんぢの墓はかに至いたりしに、爾なんぢの至淨しじょうなる體たいを

得えずして、天使てんしに因よりて新あたしき至榮しえいなる奇蹟きせきを知しりて、使徒等しとらに謂いえり、世界せかいに大おおなる

憐あわれみ、主たまは復ふく活かつし給たまえり。

光榮こうえいは父ちちと子こと聖神せいしんに歸す、今いまも何時いつも世世よよに、アミン。

生神女讃詞 視みよ、イサイヤの預言よげん應かないて、童貞女どうていぢよは子こを生うめり、生うみし後のちも生うむ前まえの如ごとく童

貞女ていぢよなり、生うれし者ものは神かみなるに因よる、故ゆえに天性てんせいは改あらめ易かえられたり。嗚呼ああ神あかみの母はよ、

爾なんぢの諸僕しよぼくが爾なんぢの堂どうに獻さぐる祈禱きとうを棄すつる勿なかれ、恵めぐみ深みき主かを爾しゅの手に抱なんぢきし者てと

して、爾なんぢの諸僕しよぼくを憐あわれみて、我等われらの靈たましいの救すくわれんことを祈いのり給たまえ。

奉神者シメオンの祝文 <sup>しゅさい いまなんぢ ことば したが なんぢ ぼく ゆる あんぜん ゆ</sup> 主宰よ、今爾の言に循いて、爾の僕を釈し、安然として逝か

<sup>けだしわ め なんぢ すくい み なんぢ ばんみん まえ そな もの こ いほうじん てら</sup> しむ。蓋我が目は爾の救を見たり。爾が萬民の前に備えし者なり、是れ異邦人を照

<sup>ひかり およ なんぢ たみ さかえ</sup> すの光、及び爾の民イズライリの榮なり。

聖三祝文 <sup>せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ</sup> 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

<sup>せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ</sup> 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

<sup>せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ</sup> 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

<sup>こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ</sup> 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

<sup>しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いぎよ しゅさい われら あやまち ゆる</sup> 至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を赦

<sup>せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よ</sup> せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

<sup>しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ</sup> 主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

<sup>こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ</sup> 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

<sup>てん いま われら ちち ねがわく なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね てん</sup> 天に在す我等の父よ、願は爾の名は聖とせられ、爾の国は來り、爾の旨は天

<sup>おこな ごと ち おこな わ にちよう かに こんにちわれら あた たま われら</sup> に行わるるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に

<sup>おいめ もの われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いぎない みちび なおわれら</sup> 債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我等

<sup>きょうあく すく たま</sup> を凶惡より救い給え。

司祭 <sup>けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ</sup> 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。



【 主日の發放讃詞 第1調 】

きゆ うせ え いしゅよ、 イウデヤのひとはかを  
救 世 主 人 墓  
ふ うじて 、 へいそつ なんぢの いさぎよきみを  
封 うじて 、 兵 卒 爾 潔 さぎよきみを  
封 うじて 、 兵 卒 爾 潔 さぎよきみを

まもるととき、なんぢはみつかめにふくかつ  
 守るとき、爾三日目復か活  
 して、せかいにいのちをたまえり。  
 せ世界生命賜  
 ゆえにてんぐんはなんぢいのちをほどこすの  
 故天軍爾生命施  
 しゅによべり、ハリストスよ、こうえいは  
 主呼光榮  
 なんぢのふくかつにきし、こおえいはなんぢ  
 爾復か活歸し、光榮爾  
 のくににきす、ひとりひとをいつくしむ  
 國歸獨人慈  
 しゅよ、こうえいはなんぢのおもんばかりに  
 主よ、光榮爾慮  
 きす。  
 歸す。

【 生神女讃詞 第1調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、  
 光榮父と子聖神歸す、  
 いまもいつもよよに、アミン。  
 今何時世世  
 どうていぢよよ、ガブリイルがなんぢによろこべ  
 童貞女爾慶

よとつげしとき、そのこえにしたがいて  
告時、其聲従

ばんゆうのしゅさいはなんぢせいなるやく  
萬有主宰爾聖約

ひつにみをとりにたまえり、ぎなるダヴィド  
櫃身取給義

のいいしがごとし。なんぢのぞうせいしゅを  
言如爾造成主

はらみて、なんぢはてんよりひろきものの  
妊爾天廣者

とあらわれたり。こうえいはなんぢ  
現光榮爾

にいりしものにきし、こうえいはなんぢよ  
入者歸光榮爾

りいでしものにきし、こうえいはなんぢの  
出者歸光榮爾

さんにてわれらをときたまいしものにきす。  
産我等釋給者歸

司祭) <sup>かみわれら たのみ</sup>ハリストス神我等の特よ、<sup>こうえい なんぢ き</sup>光榮は爾に歸す、<sup>こうえい なんぢ き</sup>光榮は爾に歸す、

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも  
光榮父子聖神歸今

いつもよよに、アミン。しゅあわれめ、しゅ  
何時世に、アミン。主憐主

あわれめ、しゅあわれめよ、ふくをくだ  
 憐主憐福降  
 せ。

司祭) <sup>し</sup>死より<sup>ふくかつ</sup>復活せし<sup>われら</sup>ハリストス<sup>まこと</sup>我等の<sup>かみ</sup>眞の<sup>そのしじょう</sup>神は、<sup>はは</sup>其至<sup>こうえい</sup>淨なる<sup>さんび</sup>母、<sup>せい</sup>光榮にして<sup>せい</sup>讚美たる<sup>せい</sup>聖

<sup>しと</sup>使徒、<sup>こくしょうほうしん</sup>克肖<sup>わがしよしんぶ</sup>捧神なる<sup>およ</sup>我諸<sup>しよせいじん</sup>神父、<sup>きとう</sup>(某)及び<sup>より</sup>諸聖人<sup>われら</sup>の<sup>あわれ</sup>祈禱に<sup>たま</sup>因て<sup>せい</sup>我等を<sup>せい</sup>憐み<sup>せい</sup>給

わん。<sup>ぜん</sup>善にして<sup>ひと</sup>人を<sup>あい</sup>愛する<sup>しゅ</sup>主なればなり、

アミ ン。

【 萬壽詞 】

か み よ 、 わ が く に の て ん の お う 、 お よ び  
 神 我 國 天 皇 及  
 く に を つ か さ ど る も の 、 わ れ ら の ふ し ゅ  
 國 司 者 我 等 府 主  
 き ょう セ ラ フ ィ ム 、 お よ び こ と ご と く の せい き ょう  
 教 及 悉 正 教  
 の ハ リ ス テ ィ ア ニ ン ら を 、 い く と せ に も ま も り  
 等 幾 歳 護  
 た ま え 。